

ごあいさつ

財団法人大阪科学振興協会理事長 森井 清二^{*)}



多くの方々に「電気と天文の殿堂」として親しまれて参りました四ツ橋の電気科学館が誕生して70年を迎えました。関係諸官庁をはじめ、大学や産業界等のご協力のもと、リニューアルを重ねてきた電気科学館は、すでに活動を終えましたが、電気科学館に熱い思いを抱いている方々はいまだにたくさんおられます。かく申す私自身も、竣工時、京都市立六原小学校の6年生でしたが、目頃愛読していた「子供の科学」で大阪にプラネタリウムができたことを知り、夏休みに母親に無理を言って、四ツ橋まで連れて行ってもらいました。椅子の背もたれが倒れ、天井が次第に薄暗くなり、一つ二つ星が見えたと思う間もなく、真っ黒な空に満天の星々が輝いた、あの時の感動は、今も忘れることができません。さらには、これがきっかけとなって、電気への興味が芽生え、今日に至るまで、人生のほとんどで電気に係わってきたことを考えますと、私にとりましても、この電気科学館の存在がいかに大きく重かったか、改めて感じている次第です。

私ども財団法人大阪科学振興協会は、平成元年、電気科学館の後継施設として開館しました大阪市立科学館の管理運営を行うことを目的の一つとして設立され、以来、20年にわたって活動して参りました。この間、市民の皆さんが電気科学館に寄せておられました信頼感を損なうことなく、新しい時代に即した科学・技術の普及教育活動をいかに展開していくかに腐心して参りましたが、おかげさまで毎年60万人から70万人のみなさま方にご利用いただけるようになりました。

電気科学館が誕生した昭和12年当時は大阪市内でさえ電灯普及率がまだ80%程度だったそうで、電気があつて当たり前という現在とは比較になりませんが、電気科学館を構想された方々が日本最初の科学館に日本最初のプラネタリウムを導入し、電気を素材にして科学・技術の普及を図ろうとした精神には現代と共通するものが感じられます。科学・技術の知識や理解力がどれだけ国民に浸透しているか、またそうした知的なものを楽しむ風土がどれだけ醸成されているかが、科学技術立国を目指すわが国の将来を左右すると申し上げても過言ではないと思います。

この点、この記念誌に寄せられました市民の皆さんの手記を拝読しまして、電気科学館がこれまでわが国の科学・技術の普及・振興や科学的なものを愛する風土作りのため、どれほど大きな貢献してきたか、また、いかに多くの先進的な取り組みをしてきたかが分りました。これから50年後に大阪市立科学館を振り返ったとき、本書に納められたような感動あふれる手記をお寄せいただけるでしょうか。私どもは是非ともそうなるよう頑張っていかなばならないと、手記を前にして、決意を新たにしたところであります。

本書には歴史的資料も収めてあります。いささかなりともわが国の科学館の発展史を知る上で活用していただければこれにまさる喜びはございません。

最後に、手記や資料をお寄せいただいた方々や原稿転載を快くお許しいただいた関係の皆様方に厚く御礼申し上げます。また、大阪市立科学館館長の高橋憲明館長はじめ職員の皆さまには編集や発行に関わってご尽力いただきましたことに感謝申し上げます。

*) 編集者注：森井清二（もりいきよじ）氏は2019年3月2日、肺炎のため逝去されました。氏は元関西電力会長で、1988年4月から90年4月まで関西経済同友会の代表幹事を務めました。